

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第 号
------	---------

氏 名 菱 田 純 代

論 文 題 目

Atrophy of submandibular gland by the duct ligation and a blockade of SP receptor in rats

(ラットにおける導管結紮およびS P受容体遮断薬による唾液腺の萎縮)

論文審査担当者


名古屋大学教授

主 査 委員

木山博資 


名古屋大学教授

委員

曾根三千彦 

名古屋大学教授

委員

宮田卓樹 

名古屋大学教授

指導教授

日比英晴 

論文審査の結果の要旨

別紙1-2





今回われわれは顎下腺萎縮の様相を明らかにするために、従来から使われている導管結紮モデルに加えて、導管周囲の組織を損傷したモデルと導管の内圧のみを上昇させたモデルを設定した。この3つのモデルでの顎下腺の形態学的変化を比較し、顎下腺に分布している substance P (SP) とその受容体である substance P receptor (SPr) に着目し免疫組織学的検討を行った。SPr は腺房細胞に存在せず SPr の遮断薬を投与し SP を減少させると腺房細胞の萎縮を引き起こした。導管細胞は放出された SP を受け取ることにより、腺房細胞の維持にかかわっていると考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 顎下腺を支配する substance P 線維の起始細胞は三叉神経節に存在する。
2. シェーグレン症候群の病理組織像では、腺組織周囲のリンパ球浸潤に伴い腺組織の萎縮・消失を認め、リンパ性組織に置換される像を示す。また導管上皮の管腔の拡張または狭窄を認める。導管周囲ではなく腺組織周囲のリンパ球浸潤に伴う事を踏まえると、導管細胞の SP は介していないのではないかと思われる。導管周囲にリンパ球浸潤を認めているかを調べたが、その点に関しては不明でありさらなる検討が必要である。
3. マウス、ウサギでの顎下腺導管・耳下腺導管・舌下腺導管結紮実験をした報告があり、今回の実験同様の腺房細胞が萎縮をし、長期間の結紮を行った場合にはさらに変性が加わったとされた。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第	号	氏名	菱田純代
試験担当者	主査	木山博資  曾根三千彦  宮田卓樹 		
	指導教授	日比英晴 		
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 起始細胞はどこに存在すると考えられるか。 2. 本研究結果から導管細胞のSPを介した腺房細胞の維持が推定されている。シェーグレン症候群における唾液分泌量減少のメカニズムとして、この点からの解釈は可能か。 3. 舌下腺、耳下腺でも同様の現象が生じるか。 <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、顎顔面外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				

学力審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第	号	氏名	菱田純代
学力審査 担当者	主査	木山博資	曾根三千彦	官田卓樹
	指導教授	日比菜晴		
<p>(学力審査の結果の要旨)</p> <p>名古屋大学学位規程第10条第3項に基づく学力審査を実施した結果、大学院医学系研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力を有するものと学位審査委員合議の上判定した。</p>				